

第18回 日本手話教育研究大会

研究発表の要旨

村越 啓子 (むらこし けいこ)

「続・日本手話語彙/あく・あける/の意味地図」

前大会の発表では、日本手話の談話における日本手話語彙/あく・あける/の実体 CL の他動詞的用法を検証した。今回の研究では、日本手話 CL 構文の自他同形/あく/の自動詞・他動詞の使いわけについて考察を行う。



赤堀 仁美 (あかほり ひとみ)

「日本手話のしくみ～言語教育としての手話教育～」

『文法が基礎からわかる日本手話のしくみ』と『日本手話のしくみ練習帳』は、手話を通じた小学校の総合的学習や成人の自習用としても使える教材。作成の目的は明晴学園の手話科において言語活動の充実のために必要な言語技術や文法力をつけることである。なぜ言語学的に手話を学ぶのか、手話科専科の教員にインタビューを行い、手話教育の必要性について考察する。日本手話の複雑な構造を学ぶ多様な学習者のニーズに応えられる教材だろう。



小林 京子 (こばやし きょうこ)

「手話奉仕員養成講座の指導法」

NA (ナチュラル・アプローチ) 手話教授法講座の修了生が、地域の手話講習会で指導する際に使用する手話奉仕員養成テキストを見ると、その内容の違いに戸惑うことだろう。本発表では、それらの違いを理解した上でテキストを参考に NA 法を活用する指導方法を提案する。具体的には、インタラクションの中で例えば日本手話の文法をインプットする方法だ。ここでいう文法とは NM のことを指し、例えば、Yes/No 疑問文や WH 疑問文などで用いられる数多くの文法要素である。



木村 晴美 (きむら はるみ)

「反転授業の要素を取り入れた授業を検証する ～書記日本語から日本手話への翻訳～」

近年、「反転授業」と呼ばれる授業形態が注目を集めている。授業と宿題の役割を「反転」させ、授業時間外に知識習得をすませ、授業で知識確認や問題解決にむけて議論等を行なう形態のことである。その反転授業の要素を「翻訳Ⅱ (書記日本語→日本手話)」の授業に取り入れた。従来型の授業では、学生が翻訳したものに対して教師がその場で指導するが、反転授業では、授業時間外に学生自身が自分の翻訳とモデル翻訳の共通点、相違点を分析する。授業ではその分析した内容に対して、翻訳上の課題や問題の解決を試みた。その授業の進め方について検証する。



報告の要旨

Joseph Featherstone (ジョセフ フェザーストーン)

「How to give effective and efficient feedback」

～効果的かつ効率的なフィードバックを与える方法～

高校時代、手話に携わり、通訳者、通訳指導者と共に仕事をすることに興味を抱くようになった。それ以来、教師のための様々な指導教材の開発に取り組むようになる。これまで10年にわたり、手話指導や通訳指導に携わり、ブリガム・ヤング大学、ソルトレイクコミュニティカレッジを初め、様々な私立大学や機関で教鞭を取ってきた。現在 GoReact 社勤務。クライアントに対し、ビデオ録画やフィードバックを通して指導を行っている。

